

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11836

研究課題名（和文）無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握：バヌアツ北部事例研究

研究課題名（英文）Transmission and transformation of intangible cultural heritage in relation to natural hazards: a case study in Northern Vanuatu

研究代表者

野嶋 洋子 (Nojima, Yoko)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・アジア太平洋無形文化遺産研究センター・室長

研究者番号：50586344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：災害多発国であるバヌアツ共和国において、近年の火山災害による被災経験をもつ北部2地域（ガウア島、アンバエ島）で地域住民への聞き取り調査を実施し、自然災害が無形文化遺産の実践や継承に及ぼす影響について明らかにした。特に、火山災害に焦点をあてたことで、避難生活という困難な状況を経た無形文化遺産の継承について、様々な知見を得ることができた。避難を通じた近隣集団との共生や交流は、それぞれの文化的実践を見つめ直し、学習・継承する機会となっている一方、現金経済、学校教育、教会活動など生活様式の変化が、無形文化遺産の危機の根底にあることが、再認識された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災害が、有形の文化遺産だけでなく無形文化遺産にも影響を及ぼすことは、東日本大震災をはじめとする災害事例を通じて、広く認知されるようになり、被災した無形文化遺産への復興支援の取り組みも見られるようになってきた。本研究は、無形文化遺産が状況に応じて変化しつつ継承されている実態について、具体的災害事例に基づいて詳述するものである。その成果は、無形文化遺産の動態を踏まえた保護の方策の構築を促すとともに、文化的状況に配慮した災害支援にも繋がる。

研究成果の概要（英文）：The project explored the impact of natural disasters on the practice and transmission of intangible cultural heritage, by conducting field research in the Republic of Vanuatu, one of the most disaster-prone countries in the world, and interviewing local communities in two northern islands that have recently experienced disasters caused by volcanic eruptions (Gaua and Ambae). In particular, the focus on the cases of volcanic hazards provided various insights into the transmission of intangible cultural heritage in the difficult situation of evacuation. While living and interacting with neighbouring communities during evacuation provided an opportunity to revisit their respective cultural practices to learn and transmit intangible cultural heritage practices, it was confirmed that changes in lifestyles, including the cash economy, school education and church activities, were the main factors threatening the transmission of intangible cultural heritage.

研究分野：文化遺産

キーワード：無形文化遺産 自然災害 火山災害 バヌアツ 環境 レジリエンス

## 1. 研究開始当初の背景

2010年代以降、2011年3月11日の東日本大震災をはじめ、世界各地で様々な大規模災害が報告されるかたわら、復興過程における文化遺産の緊急レスキュー事業や保護の取り組みが、国際的枠組としても進展しつつあった。「仙台防災枠組 2015-2030」にも文化遺産の保護が盛り込まれ、ユネスコ中期戦略においても紛争後・災害後状況への対応が重要課題として位置づけられたが、そうした活動は主に有形の文化遺産に集中している傾向があった。無形文化遺産という概念としても新しい領域における議論は遅れを取っていたものの、2010年代後半には、災害復興やリスクマネジメントにおける様々な無形文化遺産の役割が注目されるようになり、無形文化遺産保護を盛り込んだ文化遺産の防災戦略や枠組の必要性が認識され始め、その第一歩として、様々な災害により無形文化遺産がどのように被災するのか、あるいは変化するのか、具体的に把握しようとする試みが進んでいた。

一方、防災研究のなかでは、2004年のスマトラ島沖地震の際、過去の津波を歌った叙事詩が防災に役立った事例をはじめ、防災に役立つ在来知への関心が高まっており、特に地域住民レベルで有効な防災戦略として注目されていた。無形文化遺産というと伝統芸能や音楽、祭礼、工芸技術などが注目されがちだが、防災研究で関心の対象となっている在来知もまた、広義での無形文化遺産として捉えられることから、無形文化遺産の視点から自然災害の文脈でその役割や防災・減災への活用の可能性について整理することは、無形文化遺産を統合した防災戦略を構築する上で重要な作業であった。

このような状況下、研究代表者はアジア太平洋文化遺産研究センター(IRCI)が2016年度より実施した「アジア太平洋地域における無形文化遺産と災害リスクマネジメントに関する予備調査事業」に関わり、アジア太平洋各地における情報収集や現地調査、現地専門家等との関係構築、研究会合などを推進してきた。本研究では、その経験および知見を踏まえ、研究代表者自身が長年の調査経験をもつバナアツを対象地域として、自然災害をひとつの変化要因として捉え、無形文化遺産の通時的変化の様相を捉えることを試みた。災害の社会文化的側面に焦点をあてた人類学・社会学的研究は数多いが、研究開始当初、無形文化遺産に着目した研究は限られており、同様に、無形文化遺産領域で自然災害を具体的に扱った研究も少ない状況にあった。本研究の最大の特徴は、自然災害を主題として無形文化遺産の本格的な実態把握を行おうとする点にあり、既存研究の空白を埋める試みであった。

## 2. 研究の目的

本研究では、自然災害により無形文化遺産がどのような影響を受け、変容してきたかを、バナアツ北部地域を事例として、歴史人類学的視点から解明することを目的とする。特に、無形文化遺産を災害により被害を受けるもの、災害から守るべき対象としてのみ捉えるのではなく、災害対応の在来知についても無形文化遺産として捉え、地域住民の生活・社会基盤やアイデンティティの表象となるような無形文化遺産が、歴史的に繰り返す災害を経て如何に変化してきたか、地域住民のもつ災害対応の在来知(無形文化遺産)が、近代化・グローバル化のプロセスのなかで如何に変化してきたか、という視点から、情報収集と分析を行う。

本研究では、無形文化遺産は知識や技術・実践として、世代を越えて人から人へと継承されてきたものであり、常に変化するものであることを前提とする。バナアツを含む太平洋地域では、大航海時代以降の西洋社会との接触、キリスト教化、植民地化とその後の独立という近代化プロセスにより大きな社会的変化を経て、現在では加速的に進むグローバル化の波のなかにあり、こうした社会全体の変化が無形文化遺産の継承の危機にも繋がっている。また無形文化遺産の実践は、必ずしも直線的に連続と続くものではなく、断絶・復興・継続というサイクルを繰り返し、再生時には新たな創造を伴うダイナミックな現象として見ることができ、自然災害は断絶・中断を引き起こす要因のひとつとして位置づけられる。本研究では、20世紀初頭以降の社会状況とその変化を踏まえた長期的視点に立ち、無形文化遺産の長期的変容も考慮しつつ、自然災害が無形文化遺産の継承に如何に作用するのかを考察した。

## 3. 研究の方法

現地での聞き取り調査を中心に情報収集を実施した。現地調査にあたっては、バナアツ文化センター(VKS)と協力し、VKSスタッフが同行する共同調査として実施することで、訪問先コミュニティにおける無形文化遺産保護の役割や重要性についての理解促進や、ニーズの把握を行うことができた。VKSの参加は特に、アンバエ火山災害で被災したコミュニティでの調査プロセスで、重要な役割を果たした。聞き取り方法としては、まず、調査について理解を得た上で、無形文化遺産について説明し、幅広い意見を得ることを目的としたコミュニティ・ワークショップを実施し、必要に応じて個別インタビューを行い、具体的な情報を得た。

## 4. 研究成果

### (1) バンクス諸島ガウア島における災害と無形文化遺産

バンクス諸島は、トレス諸島と併せてバヌアツ最北端のトルバ州を構成する。ガウア島(面積 342km<sup>2</sup>)は、ヴァヌアラヴァ(面積 314km<sup>2</sup>)とともにバンクス諸島最大級の島で、ともに活火山を擁する。ガウア島のガレット火山には南北 9 km に及ぶカルデラ湖(レタス湖)があり、世界遺産の暫定リストに入っているのに加え、ナショナル・ジオパークなど湖を含む環境保全活動も行われている(Willie 2016)。

ガレット山は 1960 年代以降、火山活動が活発化しており、VEI(火山爆発指数)レベル 1 - 2 程度の噴火が 18 回程度確認されている(Smithsonian Institution n.d.)。1973 年 10 月 - 74 年 1 月の噴火の際には、全島民がヴァヌアラヴァ島の州都ソラに避難し、2009 年 9 月から 2010 年 9 月の沈静化まで長期にわたって続いた噴火の際には、ガウア西部の住民約 250 人が北東部の集落に 6 か月から 18 か月にわたって避難した経験を持つ。2009 年噴火の際には、公共施設等に全避難者を収容するのではなく、集落がホストとなって各家庭が避難者を受け入れた。

ガウア島西部は、様々な伝統文化が継承されている地域として知られる(Wilson and Nojima 2018)。一方、空港のある北東部や東部にはモタラヴァ、メラヴァ、メリグなど隣接する島からの移住者が多い。そのため、西部住民にとって北東部での避難生活は、同じ島のなかにあっても文化的に異なる集団と接するものであり、無形文化遺産の継承においては、以下のようなネガティブな意見が大多数を占めた。

- ・ カストム(伝統文化)についての主な学習はサラゴロ(バンクス諸島の秘密結社組織の集会場所)を通じて行われるが、避難先にサラゴロはないため実践できない。
- ・ ホストコミュニティにコメ・小麦などの食料物資が供給されたため、一時的ではあったが、網籠の代わりに米袋などを利用する機会が増えた。
- ・ 若者世代を中心に、新たな流行を取り入れる傾向が強くなり、伝統に対する敬意や関心が薄れた。
- ・ 西部同様の生活ができるとして島民のホストファミリーによる受け入れが行われたが、その結果、西部コミュニティ独自の文化的実践を継承することが難しくなった。1973 年の避難経験と比較し、公共施設など独自の避難所のほうが、自らの文化を保持するのは容易だった、との意見もあった。

火山噴火に伴う火山灰の降下により、西部地域の集落や耕作地は甚大な被害を受け、避難生活により、様々な無形文化遺産の実践が一時的に継続できなくなったものの、災害によって無形文化遺産が危機的状況に陥った状況は、ここでは確認できなかった。

一方、西部における生活再建過程において、様々な無形文化遺産が役割を果たした。

- ・ 年長者を中心に、一部の人はアロールートのデンプン利用など、非常食の知識を保有している。こうした人々が西部各地への帰還と再建を牽引した。
- ・ 在来建築で用いるサゴヤシ(ナタンゴラ)の葉を利用した屋根材は、トタン屋根よりも火山灰に強いことが認識されており、現在でも利用されている。
- ・ 地域で重要なタロイモの品種が失われたが、近隣地域から同様の性質をもつ品種を獲得することができた。
- ・ 火山灰は農作物にダメージを与える一方で、土壌を豊かにすることも認識しており(「強いヤムが育つ」など)、地域への帰還を後押しした。

## (2) アンバエ島火山災害と無形文化遺産

### 2017-18 年の火山災害と全島避難

アンバエはバヌアツ北部最大の島であるエスピリトゥサント島(以下サント)から東へ約 50km の位置にある面積 398km<sup>2</sup> の火山島である。その東に南北に連なるマエウォ島、ペンテコスト島と合わせて、現在の行政区分によるペナマ州を構成し、アンバエ東部のロンガナは州都としての行政機能を担っている。バヌアツ北部の中核都市であるサント島ルガンヴィルに居住し仕事を持つ人々も多い。

アンバエ島中央にはマナロ火山は 1990 年代以降、活動期に入ったと見られ、1995 年、2005 年など噴火に伴うリスクが高まる時期があった。その後、2017 年 9 月中旬以降、噴火活動が活発化し警戒レベルが引き上げられたため、バヌアツ政府は非常事態宣言を発令し、約 11,000 人の全島民に対して島外への避難を指示した。その後一度はアンバエへの帰還が認められたものの、2018 年 3 月末以降、再び活火山活動が活発化し、降灰による土地、作物、水資源への被害、呼吸器疾患など健康の悪化への懸念が深刻となり、全島民に離島避難が命じられる事態となった。並行して政府は近隣の島(ペンテコスト、マエウォなどが候補となった)へのアンバエ島民の移住計画を進め(NDMO 2018)、当時は「Island of no return (戻れない島)」(The Guardian 19 April 2018)など、帰島は困難であるとして報道された。

この 2017-18 年の噴火災害の際、アンバエ島西部住民を中心に、多くの人々(島民の約 8 割)はサント島に避難しており、2019 年 9 月の調査時点では、都市ルガンヴィル近郊に土地を得てコミュニティを形成しつつあった。一方、東部住民の多くは対岸のマエウォ島に避難し、マエウォ島集落に分散して受け入れられた(3000 人弱)。政府はマエウォを第 2 のホームとした居住地形

成を推奨したが、2018年11月末に非常事態宣言が解除されると間もなく人々はアンバエ島へと戻りはじめ、2019年3月までで約4000人、同年11月までで合計約7000人が帰島し、大多数の人々は元の集落に戻って生活を再建しはじめた(10M 2019, 2020)。

#### 避難者コミュニティへの聞き取り調査

2019年9月、バヌアツ文化センターと協力し、以下のアンバエ島民のコミュニティを対象に、無形文化遺産の実践に関わる聞き取り調査を行った(図1)。

- a. サント島ルガンヴィル近郊に移住した人々の居住地
- b. マエウォ島に残り、内陸部に土地を得て「第2のホーム」建設に努める家族
- c. アンバエ島に戻った人々(ロンガナおよび北西部集落)

サント、マエウォに避難したアンバエ島民の無形文化遺産については、2018年11月段階でバヌアツ文化センターとファーザー・アーツによる調査が行われており(VKS 2018a.b)、今回の火山災害に直接かかわる被害や懸念として、以下のような状況が確認されていた。

- ・ 婚姻や死者の埋葬など重要な儀礼にはブタと編みゴザが必要だが、避難先ではこれらの入手が困難で、適切な儀礼が実施できない。
- ・ アンバエの編みゴザには、他の島には存在しない特別なパンダナスの品種を使用する。火山灰によってこのパンダナスの品種が絶えてしまうと、儀礼で重要なゴザを製作することができなくなる。この危惧は、他地域における同様の性質をもつパンダナスの再発見に繋がった。

しかしながら、無形文化遺産の実践や継承に関わる危機はそれ以前から存在しており、その要因として多くの人々が挙げるのは、キリスト教の普及と教会関連活動、および学校教育による生活スタイルや社会的価値観の変化、時間的制約、都市部との往来増加による都市の流行の地域への拡散、といった課題である。若者の関心は都市部の流行や先端的なデジタル技術などに向けられており、地域で継承されてきたカスタム(伝統)への関心はそもそも希薄な傾向にある。一方、伝統的知識や技能を熟知した老人側には、若者による伝統的知識の乱用を恐れて積極的な継承活動を控える傾向がある。教会活動や学校教育に時間を取られ、ナカマル(男子集会所)を介したカスタムに関する学習が衰退するなか、こうした世代間の認識のズレを補正し相互に歩み寄れるような継承の機会を創出することが、次世代への無形文化遺産継承には不可欠である。

マエウォ島への避難と、避難生活を通じたマエウォ島コミュニティとの接触は、アンバエ島民、マエウォ島民それぞれが、自らの文化を見つめ直し、近隣集団の文化について理解する機会でもあった。例えば以下のような状況があった。

- ・ 避難者としてマエウォ島民のなかに暮らすことで、マエウォ独自の手法による農耕(タロイモ水田栽培)を体験し、マエウォ・スタイルの調理法を学んだ。また、避難先の家で過ごす時間が多く、余暇を利用して編みゴザ作りを学び始めた。
- ・ ペナマ州の島々では、棒状のサンゴを粉碎具(バシス)として利用し、カヴァ飲料を抽出する手法が広く実践されてきた。アンバエでも、2000年代初頭には各家庭で日常的に実践されていたが、その後、実践は衰退し、カヴァ・バーでのカヴァ飲みが主流となってい



図1 調査地の無形文化遺産事例

(左) アンバエの伝統的網ゴザ、シンゴについて説明するVKSフィールドワーカー；(上) コミュニティで世代を超えて継承されてきた大型の割れ目太鼓は、避難時、島に取り残された。

た。一方、マエウォでは現在でも頻繁にこの伝統的手法でカヴァ飲料が作られており、その状況を体験したアンバエ避難者の間で、伝統的カヴァ飲みを再興する機運が高まった。

- ・ 両地域において主食であるタロイモ料理を中心に、調理法やレシピの共有が進んだ。
- ・ マエウォに移住する決意をした家族は、アンバエ島民としての意識は持ちながらも、その違いを積極的には主張せず、移住先の流儀に適応しようとしていた。
- ・ マエウォ島コミュニティにおいては、アンバエ島民の移住先と指定されたことで、アンバエの人々と文化的実践の流入とマエウォ独自の文化の保持・継承への懸念が示された。

### (3) 展望

本研究開始当初に進行中であった火山災害に注目したことで、調査では、避難という困難を経た無形文化遺産の継承について様々な知見を得ることができた。特に、避難者と彼らを受け入れるコミュニティの間に生じる様々な交流が、無形文化遺産の実践の継承、変容、再興、あるいは再創造の契機となっていることが明らかになった。

調査事例のなかでは、資源の枯渇や特定の場所と切り離されることによる実践の一時的停止や中断、延期といった状況を除き、災害を直接の原因として無形文化遺産が大きく衰退する状況は確認されず、インタビューのなかでは常に、現金経済の浸透、学校教育、教会活動に伴う生活スタイルの変化などが、様々な無形文化遺産継承の危機の要因として話題となっていた。これは災害の有無にかかわらず、平時における無形文化遺産保護の必要性を示すものである。また、群島各地に活火山をもつバヌアツにおいて、大規模噴火災害は今後も想定されるリスクであり、本研究で得られた知見は、文化的多様性に十分に配慮した避難計画の策定にも貢献できるだろう。

### 引用文献

- IOM (International Organization for Migration) 2019. DTM Vanuatu-Ambae Evacuee Response, Returns Snapshot (14–18 March 2019). IOM, Vanuatu.
- IOM (International Organization for Migration) 2020. DTM Vanuatu-Ambae Evacuee Response, Returns Report - Round 6 (November 2019). IOM, Vanuatu.
- NDMO (National Disaster Management Office), Vanuatu 2018. Maewo Response and Recovery Action Plan: Ambae Volcano. Vanuatu National National Disaster Management Office, Port Vila.
- Smithsonian Institution n.d. Gaua Eruptive History. Global Volcanism Program. <https://volcano.si.edu/volcano.cfm?vn=257020>
- VKS (Vanuatu Kaljoral Senta) 2018a. Santo Ambae ICH field Trip Report. Vanuatu Cultural Centre, Port Vila.
- VKS (Vanuatu Kaljoral Senta) 2018b. Maewo Ambae ICH Field Trip Report. Vanuatu Cultural Centre, Port Vila.
- Willie, E. 2016. Forestry and Protected Area Management Project: Cultural Survey of Lake Letas. Unpublished Report. Vanuatu Cultural Centre, Port Vila.
- Wilson, M. and Nojima, Y. 2018. An ICH-Disasters Dialogue on Gaua Island, Vanuatu. In: W. Iwamoto, et al. (eds.), *Preliminary Research on ICH Safeguarding and Disaster-Risk Management in the Asia-Pacific Region: Project Report for FY 2016-2017*, pp.97-114, International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region (IRCI), Osaka.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ballard Chris、Wilson Meredith、Nojima Yoko、Matanik Richard、Shing Richard	4. 巻 30
2. 論文標題 Disaster as Opportunity? Cyclone Pam and the Transmission of Cultural Heritage	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Anthropological Forum	6. 最初と最後の頁 91 ~ 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00664677.2019.1647825	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Yoko Nojima
2. 発表標題 Local Knowledge to Cope with Natural Hazards and Disasters in the Pacific: Cases of knowledge and practices contributing to community resilience in northern Vanuatu
3. 学会等名 The 3rd international symposium by the Museum of Natural and Environmental History, and the Mt. Fuji World Heritage Centre, Shizuoka（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------